

第二回「文芸思潮」短歌賞 発表

第二回「文芸思潮」短歌賞に御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。今回は前回に比して約二倍——総数一四名二二六首が集まりました。当初の目的である日本の伝統に則った叙情歌としての短歌、自然と人生とに和した詠嘆精神を宿した作品をより充実した形で求めることができました。厚く御礼申し上げます。

昨今の日本の現代短歌は荒廃のうちにあり、正岡子規が提唱した近代短歌から離れて言葉や観念の遊びになっている状況にあります。これに歯止めをかけるべく、この短歌賞を始めましたが、今回もそれに応じてくれた方々に、短歌精神の生き生きとした息吹を感じることができました。

一月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれ、それらを通過した作品を対象に、四月三十日、福田淑子、五十嵐勉の選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

第三回「文芸思潮」短歌賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。

〔「文芸思潮」短歌賞選考委員会／文芸思潮〕

優秀賞

安野たかし

(山口県山口市)

華央子

(北海道茅部郡)

萱島 享

(大分県大分市)

石井和子

(和歌山県西牟婁郡)

日高千佳子

(東京都目黒区)

田和 明

(神奈川県小田原市)

奨励賞

新井巳喜雄

(埼玉県児玉郡)

廣島佑亮

(愛知県北名古屋市)

多治川紀子

(大阪府大阪市)

川野忠夫

(群馬県伊勢崎市)

緋沙

(沖縄県八重山郡)

白藤巳玲

(埼玉県本庄市)

芍薬

(千葉県千葉市)

森山緋紗

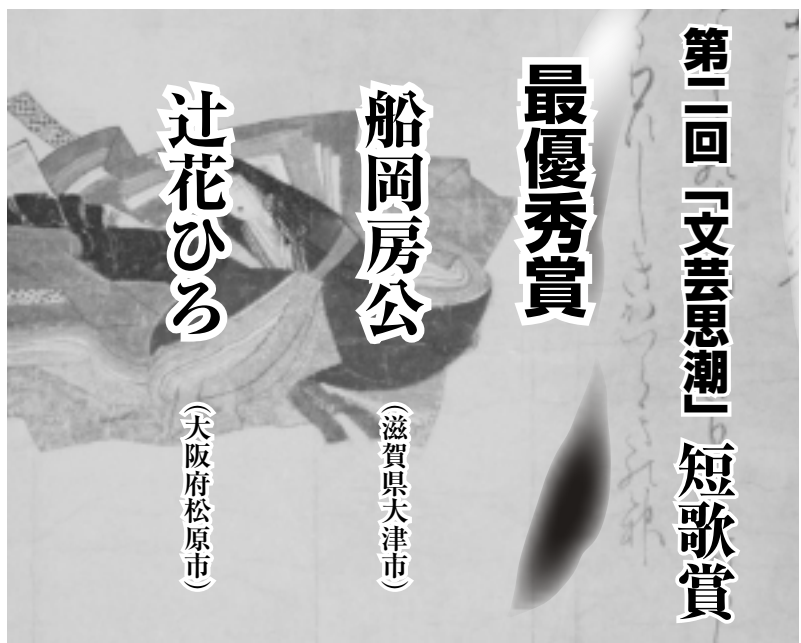
(神奈川県横浜府)

河野 計

(大分県大分市)

住吉和歌子

(北海道札幌市)



最優秀賞

第二回「文芸思潮」短歌賞

船岡房公

(滋賀県大津市)

辻花ひる

(大阪府松原市)

選評

叙景と調べ

五十嵐 勉

第二回の文芸思潮短歌賞は第一回の倍以上の二一四人の方々から応募をいただいた。倍となれば満足のいく応募数かと言われると、まだまだ足りない気がする。現代の短歌の現状を見ると、これでいいのかと不満を抱いている人はもつとたくさんいるのではないかと思うし、隠れた名歌、秀歌も多いと思うからである。しかしとにかく増えて、それに比例して全体的な質も上がっている感触は喜ばしいことだった。

また昨年応募してくれた方々が、今年も持続的に寄せてきてくれているのもうれしいことで、こうした傾向が何かを生みだしていく発展の気配に繋がっているのを覚えた。

最優秀賞は二人出た。そのうちの一人、辻花ひろ氏は昨年の優秀賞の受賞者で、継続の成果を体現している。しかも昨年よりもいっそう氏の持ち味が生かされて、命を見つめていとおしむ優しい眼差しが深く漲っていて、心の洗われる歌になっている。

た韻律が響いている。

目を閉じて風の音きく葦の原つがな無きこそさきはひなれと

目を閉じながら風の音を聞くことによつていっそう鮮やかに葦の原の情景が浮かび上がってくる手腕は、鍛錬を積んだ技量を感じさせる。「さきはひ」は万葉集に出てくる「幸い」の意味の言葉で、自然に流れ出てくるところにも作歌の蓄積が反映されている。

朝の陽を浴びて草食む牛の背に遠き山々重なりて見ゆ

日高千佳子氏の作品も牛の背と山々の姿が重なるところに大きなものの存在が浮かび上がる秀歌となつていて、生かされている牛や自分たちが感じられる。

落日の光を透すさきて芒の穂かがやく原にハモニカ聞こゆ

八月は哀しき雲の立ちのぼり母を呼ぶ声こども呼ぶ声

優秀賞の田和明氏の歌と安野たかし氏の歌は叙景に加え懐かしさや親子の情愛の高まりがある。そこに感情の旋律が麗しく流れている。ただ後者は体現止めが余韻を切り

点滴の針刺さりたる右手を撫なつ

われ支へくれし百年ちかく

また今回は歌の領域がひろがって、雄大な自然を描くものも少なくなかった。船岡房公氏の歌は中でも際立つた結晶度を見せている。

あかときの雨の名残りの道ゆけば遥かに霧きらふ観山えいざんの嶺

船岡氏は作歌キャリアも長いらしく、その言葉には古典の素養も豊かに綾織られ、隙のない緊密な流れは見事である。格調の高さも感じられるが、逆に古典の教養が現代を隔てる壁を生じている面もある。

叙景に込める人生の感慨は、作品として他にもかなり多く、また優れたものがあり、それが今回の特色となつていった。

石井和子氏の歌も、鉄路の果てと流れ星がうまく協奏し、人生の哀感を醸している。

軋む日もありし鉄路は終着の故郷はるかに流れ星降る

また萱島たか享氏の作品も古典に根差した叙景に、落ち着い

捨ててしまつているのが惜しまれる。

叙景のオーソドックスな形から外れた歌も今回いくつか、いいものがあり、それは必ずしも伝統短歌に与しないが、魅力は湛えているのであって、短歌が別な可能性としても開花していることはよく示している。伝統はまた伝統以外のものの働きかけによつていっそう豊かに膨らんでいくものでもあるだろう。優秀賞の華央子氏の作品、また奨励賞の森山緋紗氏の作品には鋭利な言葉の中に深層を穿とうとする造形が感じられる。

風荒ぶ内浦湾の断崖の鷹の眼光一点を射す

盲目の馬が嘶いく冬の果て海黒々と祈りをはらむ

奨励賞の中にはリアリズムとして迫真力のある作品もあり、白藤巴玲氏の歌はその筆頭に挙げられる。

ときおりのドライアイスの軋む音今宵を父の亡骸と居る

また昨年に引き続き、新井巳喜雄氏は同じテーマで過疎地の荒涼を伝えてきてくれたし、川野忠夫氏の人間の親しさの中に込められた優しい心の襞を細やかに表して、温めてくれた。

月光に照らされし家冴え冴えと谷間の村は無人となりて
ルビ降りて孫にやさしき文字書けば
いつしか人を許しておりぬ

今回多くの短歌に接して感じたことは、新聞や雑誌の現代短歌の潤いのない、深みや趣を失った枯れ草の群れのよ
うな流行短歌とは別に、しっかりと自然や生活に根差した
作歌営為が日本には存在するということだった。またそれ
らの歌壇に見られる調べのなさは、低劣な音楽を聴かされ
る不快感があったが、寄せられた作品の中には、優れた音
楽性を蔵したのも少なからずあった。音楽だけに偏って
いるものもあって、それは最後に残らなかったが、やはり
短歌は調べの美しさも備わっていて、その流れで歌い上げ
る高まりが命の息づきを響かせてくれるものであってほし
い。

松の葉の葉毎に結ぶ白露の

置きてはこぼれこぼれては置く

正岡子規のこの歌の調べをもう一度味わっていたたくこ
とを結語としたい。

自然と向き合う息遣い

福田淑子

今回の短歌賞最優秀賞の二作品は、どちらもしみじみと
した人生の実感に裏打ちされた力強い骨太の歌である。
生き続けるということは、喜びと苦渋のないまぜになっ
た言いようのない感情を内に秘めながら、自然の成り行き
として最期の時を迎えるということである。歌はそのよう
な時間をじっくりと熟成させて、三十一文字の韻律の中
に閉じ込める。それゆえ、言葉足らず、または思い多くして
定型に収まらずということが、ままある、というのも、こ
の韻律の「ままならぬ」ところである。

大賞や優秀賞の中には、旧かな遣いと新かな遣いが混在
していて、歌の仕上がりとして危ういという作品もあつた
が、選考委員長の五十嵐氏の、「それはこちらで修正すれ
ばいいのです。形の出来不出来より、思いの深さ、歌意の
実を採りましょう」というおおらかな、それでいて眼光鋭
いひとことに、型の整った作品に拘るといふ軟弱な姿勢を
改めた。しかし、それぞれの作者の貴重な経験や思いを私
たちがすべて間違いなく受け止められるとも限らない。そ
れぞれの歌の言葉の連なりからじっくりと伝わってくるも
のを、おのれの体験と照応させながらしみじみと湧き上が



五十嵐 勉
いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
79「流謫の島」で群像新人
長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・
NTT プリンテック主催第1
回インターネット文芸新人賞
最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学
賞受賞
15より歌人越山しづかの勧め
で短歌誌「美知思波」入会

佳作

| | | |
|--------|--------|--------|
| ゴルビー長田 | 米長 保 | 松下三夫 |
| 終 二郎 | 佐藤優羽 | 日野正美 |
| 東家芳寛 | 風間洋平 | 内山浄子 |
| 坂井 傑 | 樋口敏子 | 江田峰子 |
| 風森漣翠 | 山水文絵 | 海神瑠珂 |
| 岩谷隆司 | 松本達雄 | 石吾弓子 |
| 朝生その子 | 萩原房子 | 原水 |
| 野月真人 | 安藤直彦 | 下村きよ子 |
| 尾内甲太郎 | 徳永逸夫 | 石田正流号室 |
| 愛闘希 | 葵井禎子 | 紫ことは |
| 島田和生 | 山本 明 | 野中 暁 |
| 瀬戸内 光 | 上久保みどり | 真岡甚一 |
| 岡崎佐紅 | 藤原 靖 | 大川智子 |
| 関口智子 | 夏井寛治 | |

ってくる余韻を味わいつつ慎重に選ばせていただいた。と
はいえ歌の解釈には正解がないことは言うまでもない。

あかときの雨の名残りの道ゆけば遥かに霧ふ叡山の嶺
船岡房公

目に映る自然がしつとりと丁寧に叙景されている。私た
ちは大きな自然の中に生かされているということを改めて
思い知る力強さがある。パーチャルな情報の渦にのみ込ま
れつつあるこの時代にあつて、身体の不感すべてを開い
て、大自然と向き合い包まれていく人の息遣いや自然に溶
け込んでいく姿が伝わってくる。「あかときの雨の名残
の」の景も韻も美しい。自然には人を癒やす力がある。

点滴の針刺さりたる右手を撫つ

われ支へくれし百年ちかく

辻花ひろ

「点滴の針刺さりたる右手を撫つ」という表現に凝縮され
た人生の時間、その痩せ枯れた心もとなし身体への慈しみ
やいとおしさには、自己愛を超えてたくましく、人間が生
き続けるということの営みを神々しくさえ感じさせてくれ
るものがある。酸いも甘いも乗り越えて百年近く生き続け
るといふことは、それだけで見事である。

優秀賞の作品は、それぞれの歌がどれも自然に照応させ

て己の立ち姿を浮かび上がらせている。作者の日々の営みまでは織り込まれていないが、切り取られた情景と、その自然の中の身の置き方で人柄が伝わってくるということに、心惹かれる。「命あるすべてのものはひたすらに華なるときを楽しむ」ことに思いを寄せ、自らにもそれを言い聞かせている安野さん、「風荒ぶ」中で「鷹の眼光」を見つめる華央子さん、「目を閉じて葦の原の風の声」を聴こうとする萱嶋さん、「鉄道の終着駅の故郷の星」を思う石井さん、「草食む牛の背」の向こうに遠き山を臨む町田さん、「光る芒の原とハモニカ」のハーモニキーに耳を傾ける田和さん、そのような自然がこの国のどこかにあるということをおもひ出しつつ、それぞれの方々の人生や日常を思いやってみる。誰しもが目にしていない何気ない風景を感慨深く歌い上げていることで、読む側も何か嬉しいような有難いような豊かな思いになる。いつの間にか、その風景に身を置きながら、さまざまな情感を歌から汲み取っている。素材で力強い三十一文字が健在であることを見出して幸いであった。

奨励賞の歌をいくつか取り上げてみたい。

偽りの我が告白を疑はぬ瘦せたる友は降る雪の中

廣島佑亮

舞台装置がしっかり設定されていて、何かドラママツ

懸命に生きていけば、時には耐え難い苦難や孤独に打ちひしがれることもある。そんな時に大自然や何気ない事柄に癒されている「私」をつかみ取るのも歌のことばである。そして、思いと形がしっくりとはまるということが、ひとつの歌という形式の出会いである。溢れくる思いを詠み込んだ後、他者のまなざしになって、客観的な目で歌を読み返して一人の読者として批評してみる。優れた批評者であろうとすることは歌を練り上げていく力となる。特に「てにをは」や旧かな、新かなについては仕上げの段階でさらに推敲をかさねていただけだと残念に思う作品が散見された。次回を期待したい。



福田淑子

ふくだ よしこ

1950 東京都生まれ

2003 短歌評論「馥郁たる叛逆—斉藤史論」で第70号『文芸埼玉』評論部門入選

2007 「孤独なる球体」で第8回大西民子賞受賞

2018 歌集『ショパンの孤独』で第13回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門優秀賞

著作に『文学は教育を変えられるか』（文学教育評論集、2019）等。短歌誌「波濤」を経て、現在短歌同人誌「まろにゑ」・現代短歌〔舟の会〕、俳句同人誌「花林花」所属

鉄幹晶子全集刊行会元編集委員

鉄幹晶子全集刊行会元編集委員

ク。この光景に心当たりがあると思うのは、映画や劇などの一場面としての記憶によるのか、自分の人生の記憶の中の心象風景に触れるからなのか。謎めいてはいるが、雪の降る静寂の中に人を立ち止まらせる。長く生きていけば、良心に痛みを伴う出来事にも遭遇する。生き残るといふことは、どこか悲痛であることを思い知らされる歌である。

ルビ振りて孫にやさしき文書けは

いつしか人を許してをりぬ

川野忠夫

これまで他者の心ない所業や言葉の数々が心の底に蓄積している。時折、それがよみがえり、年を重ねてもそれらを恨む思いに苦しむ。すると己の恥すべき所業も思い出されて、後悔の念に苛まれる。そんな時は「罪を憎んで人を憎まず」という諺が空しいお題目となり、心が粟立つ。一瞬でもこの歌に詠まれたような心境になれたら有難いことだ。そのように思える瞬間を逃さず切り取ってきた人間力を感じさせる歌である。ただ、孫という存在に縁のない人にとつては、あまりピンとこないかもしれないという危惧もある。応募されたどの作品にも、それぞれの人生や、様々な魅力があつて興味を引かれた。

歌を詠むということには、もろもろの煩悶を排出する「排悶」という力がある。こころもとない「私」を抱えて



福田淑子歌集「ショパンの孤独」

入選

山野さくら
田浦チサ子
平尾三枝子
独活山強実
溝口悦子
近藤國法
愛未里
川村 栄
杏藤 伶
前田達生

外山寛子
小林捷恵
榎本遼太
石田真一
原比呂子
矢尾板素子
田中妙子
木蓮
柳風亭清三
高橋 良